

『法華經』 常不輕菩薩品にみられる男女に係る命令語形の差異

笠松直（仙台高専／東北大学）

世上「仏教は本質的に平等思想である」と言われ、ひとは經典にその徴憑を求める。この際『法華經』は参照されること最も多い經典のひとつであろう。第 XII 章（勸持品）では摩訶波闍波提など比丘尼たちが授記を受ける。この法門を聞いて受持するなら、女性としての生存は今生が最後になると第 XXII 章（藥王菩薩本事品）は説く。女性救済への志向は明らかで、第 XI 章（の提婆達多品相当部分）には龍女の成仏が説かれる。

本発表では第 XIX 章（常不輕菩薩品）にみられる命令法語形の変遷とその意義を論じる。

常不輕菩薩は男性たちに *carantu* と敬称の命令法を用いる：KN XIX: 378,2 *sarve hi bhavanto bodhisattvacaryām carantu* 「皆は、貴殿たちよ、菩薩行をなされよ」。他方女性たちには 2 人称の命令法を用いる：KN XIX: 378,7 *sarvā yūyam bodhisattvacaryām caradhvam* 「君たちは皆、菩薩行を行え」。しかし *car* は通例、能動態で活用する動詞である。後者の如き中動態語形は BHS 文献としても異例である。この語法の意図は何処にあるのか。

ネパール系写本群の読みは散ける。男性たちに *caranti*、女性たちに *caradhvam* を宛てる見解は古く、無視できない：ネパール国立公文書館本 140a3 *sarve hi bhavanto ... caranti* ; 140a5 *yūyam ...^xcaratham* (cf. 英蘭王立アジア協会本 135a3 *cari[tāvatī]dhvam*)。男性側に *caradhvam* を、女性側に *caramti* を宛てる真逆の例も存する（北京本 317,32 ⇔ 318,8）が、奇妙なことに男性たちに複数形を、複数の代名詞 *yūyam* を用いながら女性たちには単数形を用いる読みも有力である（大英図書館本 136a6 *caranti* ⇔ 136b2 *carati*)。

原初的には Kashg XX: 363b3 *sarve yūyam bodhisattvacārikām caratha* ; 364a1-2 (bodhisattva)cārikām (ca)ratha の如く BHS 語形で、男女の区別なく「菩薩行を行え」と読んだものであろう。等しく二人称の命令法であり、語法上、男女の取扱いが平等だったと言える。

恐らく伝承の過程で男性側に *bhavanto* と敬称を付した写字生があり、それ故 *caranti*（乃至 *carantu*）の読みが生じたものであろう。女性に係る定動詞形については梵語化される際、男性と同様の敬意表現を宛てることに躊躇があったものか、異例な差異化が試みられている。こうした言語感覚には区別の意識が存し、時に差別に転換しかねない。僅かな語法の差異と変遷に耳を傾けることは無意味ではなかろう。それは我々の意識の反映であるからである。

<キーワード>：「常不輕菩薩品」，「仏教混淆梵語文法」，「動詞 *car*」